

小 学 校

平 成 16 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

特 別 活 動

東 京 都 教 職 員 研 修 セ ン タ ー

目 次

I	主 題 について	-----	1
1	主 題 設 定 の 理 由		1
2	「豊かなかかわり」について		1
3	「ともに生きる力」について		1
II	低 学 年 分 科 会	-----	2
1	主 題 設 定 の 理 由		2
2	研 究 構 想 図		3
3	研 究 の 内 容		4
4	成 果 と 課 題		6
III	中 学 年 分 科 会	-----	7
1	児 童 の 実 態 と 主 題 設 定 の 理 由		7
2	研 究 構 想 図		9
3	研 究 の 内 容		1 0
4	成 果 と 課 題		1 2
IV	高 学 年 分 科 会	-----	1 3
1	主 題 設 定 の 理 由		1 3
2	研 究 構 想 図		1 4
3	研 究 の 内 容		1 5
4	成 果 と 課 題		1 7
V	児 童 会 分 科 会	-----	1 8
1	主 題 設 定 の 理 由		1 8
2	ア ン ケ ー ト 結 果		1 9
3	研 究 構 想 図		2 0
4	研 究 内 容 と 実 践 事 例		2 1
5	成 果 と 課 題		2 3
VI	成 果 と 課 題	-----	2 4

豊かなかかわりを通して、ともに生きる力の基礎をはぐくむ特別活動

I 主題について

1 主題設定の理由

今日、人とかかわることを面倒だと考えたり、自分の考えだけに固執し、友達の考えを受け入れなかったりする児童が多くなった。また、休み時間にひとり遊びや2、3人で遊ぶことを好む児童や、自分の思いや考えを十分に伝えられず、ささいなトラブルも解決できない児童も増えている。こうした問題の背景には、児童の「人とかかわる力」の低下があげられる。

児童の取り巻く環境として、テレビやゲームをはじめとする個を対象にした様々なメディアが急速に発達した。また、少子化における大人の過干渉や放任などの影響で、人やものとかかわる経験を重ねる場が減ってきている面も見受けられる。そのため、個人や少人数での遊びが増え、人とかかわりは希薄になっている。

人とかかわりが減少したことは、自分の思いや考えを伝える場面や、自分の存在を認めってもらうことが少なくなることにつながり、それは「人とかかわる力」を伸ばすことができなくなってきている原因でもある。

そこで、本部会は、特別活動のねらいを踏まえ、児童が人とかかわり合う場を増やし、多様化することで「人とかかわる力」を育成し、「ともに生きる力」をはぐくむことを研究の目的とし、上記の研究主題を設定した。

2 「豊かなかかわり」について

研究を始めるにあたり、学級活動における児童の様子を改めて観察することにした。その結果、児童には「人とかかわり合うことが楽しい」という経験が不足しているのではないかと課題が明らかになった。

意見を出し合い、実現する楽しさを味わう経験は、人とかかわる意欲を育てるためには欠かせない。その点から、「集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする主体的・実践的な態度の育成」をねらいとした特別活動のもつ役割は大きい。

特別活動は、望ましい集団活動を通して、互いの必要性を感じ、共感し合う経験を積み重ねる中で「自分もよく、友だちも楽しい。」と実感させることができる。また、今回の研究では、特別活動においてより有意義なかかわりを実現するために、他教科等での学習も視野に入れて「豊かなかかわり」の場をつくり出すことが大切であると考えた。

3 「ともに生きる力」について

望ましい人間関係を築くためには、一人一人が自分の存在価値を認識し、自己肯定感を高めながら、相手の存在価値を受け入れ、認めていくことが大切である。自分の思いや願いを伝えるとともに、相手の思いや願いを受け止め、ともに願いを実現しようとする経験を積み重ねることが必要である。

本部会では、お互いの存在を認め合い、望ましい人間関係を築きながら、お互いのもつ力を生かし協力して生活する力を「ともに生きる力」と考えた。この力は、人間が生涯にわたって培う力であるため、小学校段階ではその基礎を築くことが重要と考えた。

以上を踏まえ、本部会では、児童の発達段階を考慮し、低・中・高・児童会の4分科会に分かれ、研究を行うこととした。各分科会では、児童の実態を分析し、分科会テーマ並びに目指す児童像と仮説を設定し、それぞれの発達段階で望まれる「豊かなかかわり」を基に「生きる力」の基礎をはぐくむ実践的な研究を進めることにした。

Ⅱ 低学年分科会

みんなが楽しむ活動への意欲を高める指導法の工夫

1 主題設定の理由

低学年の児童の中には、一人遊びを好み、自分の意志を表現したり、相手の思いを受け入れたりするなどの人とのかかわりがうまくできない児童が増えている。また、たくさん的人数で遊んだり、活動したりする体験が少なく、「みんなでやって楽しかった」という経験が少ない児童も多く見られる。

これらの要因として、児童の家庭環境が多様化し、核家族や少子化、共働き家庭や児童の習い事の増加などで、家庭の中でさえ人とかかわる経験が希薄になり、児童自身の活動経験に差があることが挙げられる。

一方、児童は「楽しい」と感じたことは、「またやりたい」と意欲的に活動に取り組み、その活動を継続したり発展させたりしようともする面も見受けられる。このように、低学年の児童は、楽しい活動への意欲はあるが、大人数での経験が少ないために、みんなで楽しむ活動ができないという面がある。そこで「みんなでやって楽しかった。」という活動をたくさん経験させることで、「またやりたい。」「みんなでやってみよう。」という意欲を高め、人とのかかわりを広げたり深めたりする体験を意図的・計画的に学校教育に取り入れることが大切であると考えた。

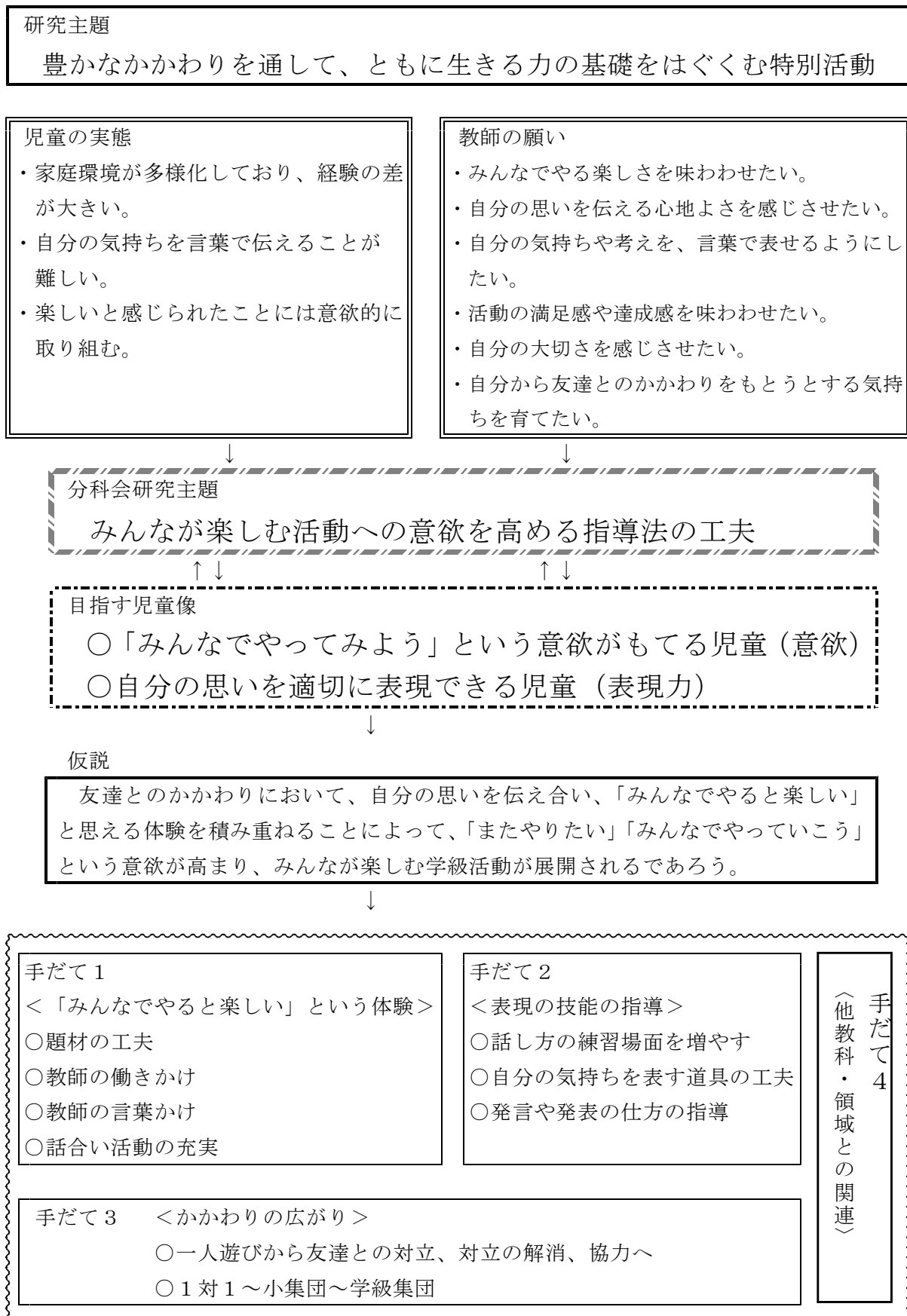
以上のような児童の実態から、低学年分科会では、分科会主題を「みんなが楽しむ活動への意欲を高める指導法の工夫」と設定し、「みんなでやって楽しかった」という経験を効果的に積み重ねるための具体的な指導の在り方を研究することにした。

このような豊かなかかわりを児童一人一人に体験させるためには、一人一人の児童が自分の意志を的確に表現するとともに、友達の気持ちや思いを受け入れることが必要となってくる。しかし、近年、低学年の児童の中には、自分の思いを言葉でうまく人に伝えることができず、「すぐ泣く」「すぐ怒る」「キレる」「黙り込む」などの行動をする児童が多く見られるようになってきている。また、友達の気持ちを理解できず、自分中心の行動に終始する面も見受けられるようになった。そこで、人とのかかわりをより広げたり深めたりしていくためには、「自分の思いを適切に表現する力」を意図的・計画的に指導し、身に付けさせていく必要があると考え、本分科会では、「表現の技能の指導」を手だてに取り上げ、重点を置いて指導していくことにした。

こうしたことを踏まえて、目指す児童像を次のように設定した。

- 「みんなでやってみよう」という意欲がもてる児童（意欲）
- 自分の思いを適切に表現できる児童（表現力）

2 研究構想図



3 研究の内容

(1) 実態調査

ア 目的

各学級で、「豊かなかかわりができている」と思われる児童に注目したときに、「友達に声をかける」「言葉で自分の気持ちを相手に伝えることができる」「よく言葉を知っている」という面が見られた。こうした行動をとることができる児童は、人とのかかわりを多く経験してきたために、言葉で思いを伝える力がより発達してきたのではないかと考えた。また、このような言語能力の高い児童は、自分の思いを人に伝えることができるために、より人とのかかわりを広げたり深めたりすることができるようになるのではないかと考えた。

そこで、児童にとって重要なかかわりの場である「遊び」に焦点を当て、児童の遊びの好き嫌いから、「人とのかかわり」の経験の状況を把握した。さらに、それらの「遊び」と言語能力との関係について調査した。

イ 実施内容

A 好きな遊び

35種類の遊びについて、「すき」「少しすき」「少しきらい」「きらい」「したことがない」の中から、それぞれ1つ選ぶ。

*実施時期：平成16年9月

*対象者：教育研究員所属校児童1・2年生 793名

B 言語能力

- ① しりとり…5分間で続けられる単語数
- ② 読字数…1分間で読める文字数
- ③ 言葉かけ…友達が失敗したときにどんな言葉をかけるか
- ④ あいさつ…日常生活からの把握

*実施時期：平成16年9月

*対象者：教育研究員の学級の児童1・2年生 102名

ウ 分析結果

35個の遊びについて分析を行った結果、今の児童の遊びの傾向は以下の7つに分類することができた。

- | | |
|------------------------------------------|----------|
| ① 集団遊び（おにごっこ・かけっこ・かくれんぼ等） | 【社会性が必要】 |
| ② 習熟が必要な遊び（一輪車・縄跳び・大縄・鉄棒等） | 【耐性が必要】 |
| ③ 室内遊び（オセロ・すごろく・トランプ） | |
| ④ 幼児遊び（砂遊び・泥遊び） | |
| ⑤ 昔遊び（けんだま・こま） | |
| ⑥ 高度な集団遊び（缶蹴り・サッカー・めんこ） | |
| ⑦ かかわりのない一人遊び（マンガを読む・集めているものを眺める・ペットと遊ぶ） | |

さらに、7つの遊び群と言語能力との関係を分析したところ、次のような相関が明らかになった。

※「習熟の必要な遊び【耐性】を好きだ」と言っている児童は、言語能力が高く、「集団遊び【社会性】を好きだ」と言っている。

※言葉かけ（かかわり）の能力の高い児童と、「習熟の必要な遊びを好きだ。」と言っている児童には、相関がある。言葉かけ（かかわり）の能力の高い児童と、「幼児遊びを好きだ。」と言っている児童との間には、相関がある。

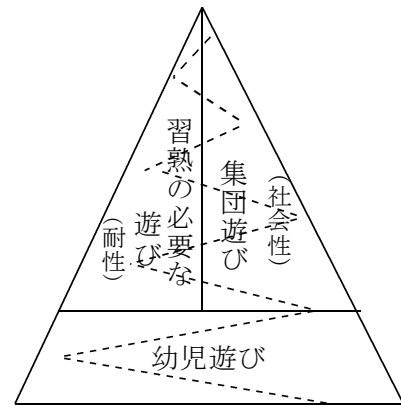
(2) 分析結果から考えられる手だて

- ◆「集団遊びを好きだ。」と言えるようにしていき、言語能力を高める。言語能力を高めるためには、習熟の必要な遊びを好きになれるようにしていき、「目標をもって、努力する経験」を積み重ねる。
- ◆「幼児遊びと習熟の必要な遊びを好きだ。」と言えるようにしていき、かかわり（言葉かけ）の能力を高める。

ア 手だて1 「みんなでやると楽しい」という体験

○ 題材の工夫

- ・遊びの機能を生かした活動を取り入れる。
 - *集団遊び【社会性】と、習熟の必要な遊び【耐性】をバランス良く取り入れる。
 - *習熟の必要な遊び【耐性】の中で、自分の得意な遊びを見つけ、その遊びに集中的に取り組めるような活動を取り入れるよう配慮する。
- (例) 学級のチャンピオンを決めよう、得意なことをのぼそうチャレンジ週間



- 教師の働きかけ ・やってみせる ・一緒にやる ・やらせてみる ・認める
- 教師の言葉かけ ・気持ちを代弁し、児童に返す。
- 話合いの活動の充実
 - ・議題を見付ける力を育てる。 (例) 議題案カード
 - ・活動の流れを見通す掲示
 - ・学級会グッズ・司会グッズの利用
 - ・体験する場の設定
 - (例) さあ始めようタイム、言ってみようタイム、やってみようタイム

イ 手だて2 表現の技能の指導

- 話し方の練習場面を増やす。
 - ・朝の会、帰りの会の活用
 - ・話合いの中で、思いを表現する体験場面を設定する。
 - (例) 言ってみようタイム、やってみようタイム
- 発言や発表の仕方の指導
- 自分の気持ちを表す道具の工夫 (例) ネームプレート、賛成反対カード
- ソーシャルスキルトレーニング
 - ※ただ語数を増やしたりうまく話したりするのではなく、内的リソースを増やし、表現したり共感したりできるように、語いや話し方を指導する。
 - (例) 遊び集団への入り方「仲間に入れて」、友達の誘い方「一緒にあそぼ」、謝り方「ごめんね」 など

ウ 手だて3 かかわりの広がり

- 幼児遊び的な機能を取り入れる。～一人遊びから友達との対立、対立の解消、協力へ～
(例)「紙飛行機大会をしよう」

紙飛行機作り(一人)→友達との競争(対立)→教え合い(対立の解消)
→ルール作り・ゲーム化(協力)

- 場や状況や集団に応じて、かかわりの範囲を広げる。～一対一→小集団→学級集団～

エ 手だて4 他教科等との関連

- 実践(定着)の場、補充の場として意図的に関連させる。

・国語科(話す・聞く) ・生活科 ・体育 ・音楽 ・道徳 など

4 成果と課題

(1) 成果

ア 児童の実態をアンケート調査によって把握することができた。その結果、児童に必要な手だてを絞り込むことができた。

- ① 幼児遊びを十分経験させ、幼児遊びがもつ学習機能を意図的・計画的に実施する。
- ② 習熟の必要な遊びを意図的に取り組めるように配慮し、題材に取り入れていく。
- ③ 言語能力を高める。

イ 「みんなでやると楽しい」という体験がたくさんできるように、題材や教師の働きかけや言葉かけを工夫したことによって、児童の「またやりたい」「みんなでやったいこう」という意欲を高めることができた。少しずつ、自分たちの力で活動を計画し、実践していく態度が見られるようになってきた。

ウ 学級活動や日常の様々な場面で、話したり聞いたりする場面を増やしたり、意図的に表現の技能を指導したりしてきたことで、児童が自分の思いを適切に表現できるようになってきた。また、自分の思いを相手に伝えようとする意欲の高まりが見られるようになった。

(2) 課題

成果アの①②③については、さらに具体的な題材や、題材を生かした指導計画を作成し、それらの有用性について検証していく必要がある。

①について

- ・幼児遊びの機能を生かした題材を発掘する。
- ・幼児遊びの機能を生かした題材を実践した時の児童の変容を評価する。
- ・実践を続けた時の児童の「かかわりの能力」の高まりを評価する。

②について

- ・習熟の必要な遊びを取り入れた題材を発掘する。
- ・習熟の必要な遊びを取り入れた題材を実践した時の、児童の言語能力の高まりを評価する。
- ・実践を続けた時の児童の「かかわりの能力」の高まりを評価する。

③について

- ・言語能力を高める手だてを発掘する。
- ・言語能力を高める手だての実践を続けた時の「集団遊び」を好むようになる度合いを評価する。

児童が互いのもち味を生かし、活動を創り上げていく指導法の工夫

1 児童の実態と主題設定の理由

児童一人一人は、小さいながらもそれぞれが「もち味の種」をもっている。児童自身も周囲の友達もまだ気付いていない個性や感性がそれである。日常生活の中で、「騒がしい」と思われがちで児童が遊びや集会では周りをもりあげたり、おとなしく目立たない児童がさりげないやさしさをみせたりすることがあるが、それが、「もち味の種」が芽を出した時である。

しかし、「もち味の種」はそのままでは芽が出ない。まず、芽を出す土壌として、互いが自分の思いや願いを積極的に伝え合い、認め合えるような学級の雰囲気、安心感、所属感が必要である。そのような中で初めて、「もち味の種」を自分の「もち味」として安心して発揮できるようになり、また、友達の「もち味」にも気付くことができるようになる。このように、互いの「もち味」を生かし合うことで、誰もが居心地の良い学級の雰囲気が醸成されていくのである。

つまり、「もち味を生かす」とは、児童一人一人が、学級成員とのかかわりを通して、自分なりのかかわり方を見つけ、お互いに安心して自分の出来ることをし、認め合うことである。

実際の生活や話し合いにおいては、自分の行動に自信がもてなかったり、自分の既習経験にこだわったりする様子も見られるなど、児童が自分の「もち味」を発揮できていない、「もち味」が生かされていないと感じる場面が多い。

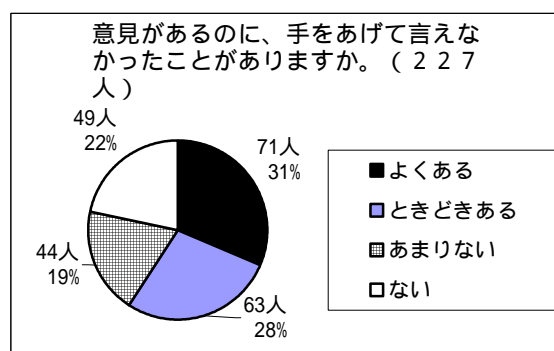
これらのことから、中学年分科会では児童の実態を次のように考え、具体的な手だてを講じることにした。

- ・ 発言できる児童は、話し合いを好み、発言が苦手な児童は話し合いを好まないのではないかと。
- ・ 話し合いの場面において「発言する」という一つの価値観にこだわっていることで、発言を苦手とする自分に自信がもてずに、意欲が下がってしまうのではないかと。
- ・ 自分がどのようにかかわったり役立ったりすればよいのか分からず、結局は友達に任せってしまうのではないかと。

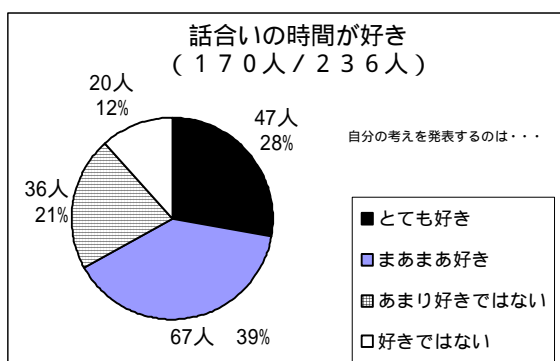
研究を進めるにあたって、本分科会教育研究員の学級児童237人にアンケート調査を行った。

アンケート結果からも、「意見があるのに言えない」という児童の実態がわかる。「友達が何とかしてくれるだろう」といった依存する態度や「まわりからの反応がこわい」といった不安な様子が見えてくる。

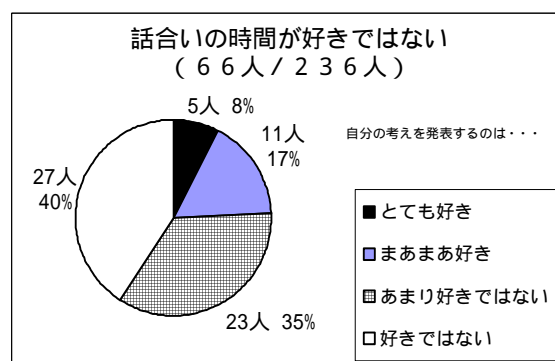
アンケート結果



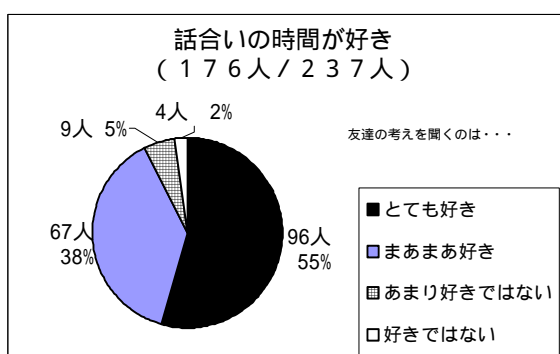
アンケート結果 - A



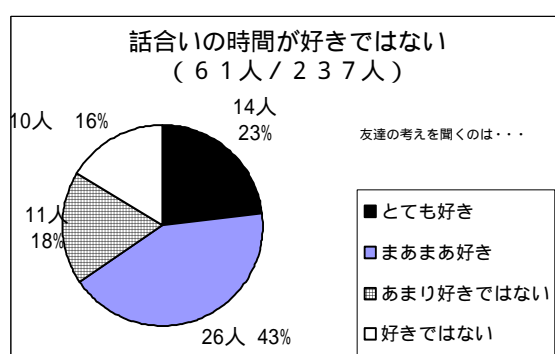
アンケート結果 - B



アンケート結果 - A



アンケート結果 - B



アンケート結果 - A、 - Bにより、本分科会の予想通り「発言できる児童が話し合いを好む」という結果が出た。

一方、話を聞くことに関してみると、話し合いが好きな児童（ - A）だけでなく、話し合いが好きではない児童でさえ、その66%が「友達の話を聞くのは好き」と答えている（ - B）。

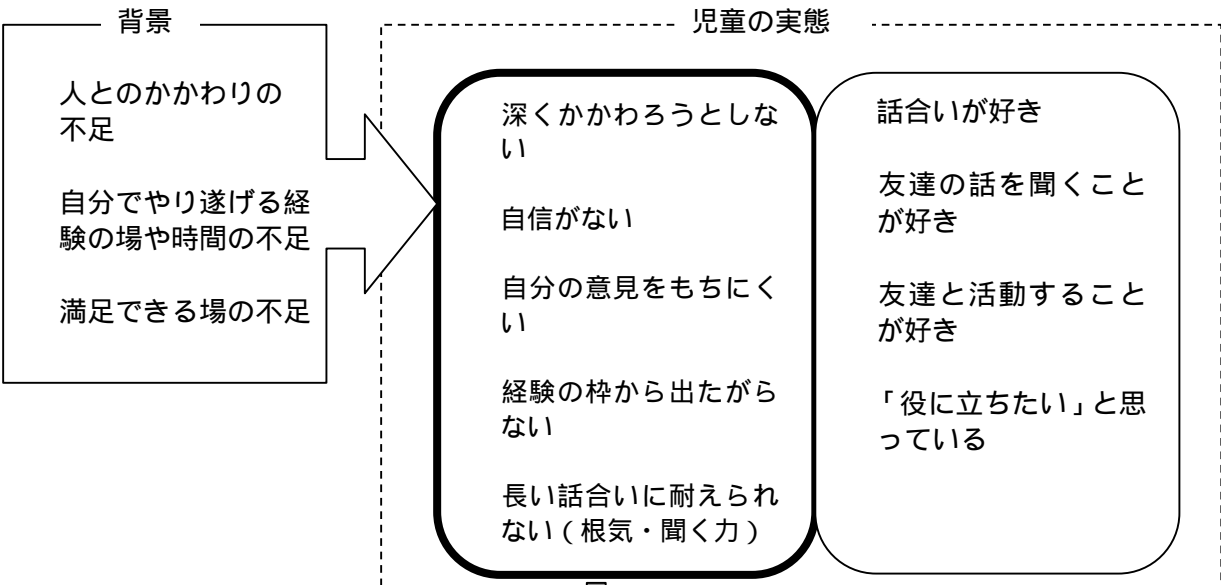
人間関係の希薄化と言われる現代において、中学年の児童は、友達との活動を好み、人とのかかわりを求めているということがアンケートの結果から分かった。

以上のことから、中学年分科会では、安心して自分なりの方法でかかわりを築いていく「もち味を生かす」こと、体験を重ね体験から学ぶこと「活動を創り上げていく過程」を大切にしようと考え、分科会主題を「児童が互いのもち味を生かし、活動を創り上げていく指導法の工夫」と設定した。このことを受け、「互いのもち味を生かして、ともに願いを実現しようとする児童」「自分の思いや考えを自分なりの方法で表現できる児童」「友達の思いや考えを分かろうとして、進んでかかわる児童」の育成を目指すことにした。とかく話し合いや集会の出来映えが学級活動の評価対象とされがちだが、そこに至るまでの過程を大切に、児童一人一人が「もち味」を生かすことが豊かなかかわりであり、望ましい集団活動の実現であると考え、研究の柱とした。

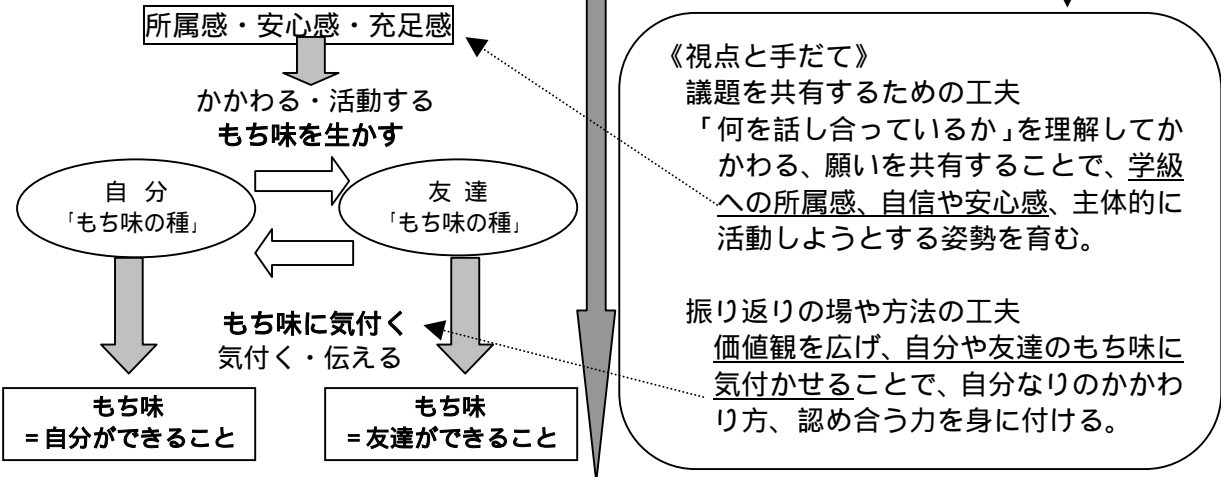
2 研究構想図

《研究主題》
 豊かなかかわりを通して、ともに生きる力の基礎をはぐくむ特別活動

《分科会主題》
 児童が互いのもち味を生かし、活動を創り上げていく指導法の工夫

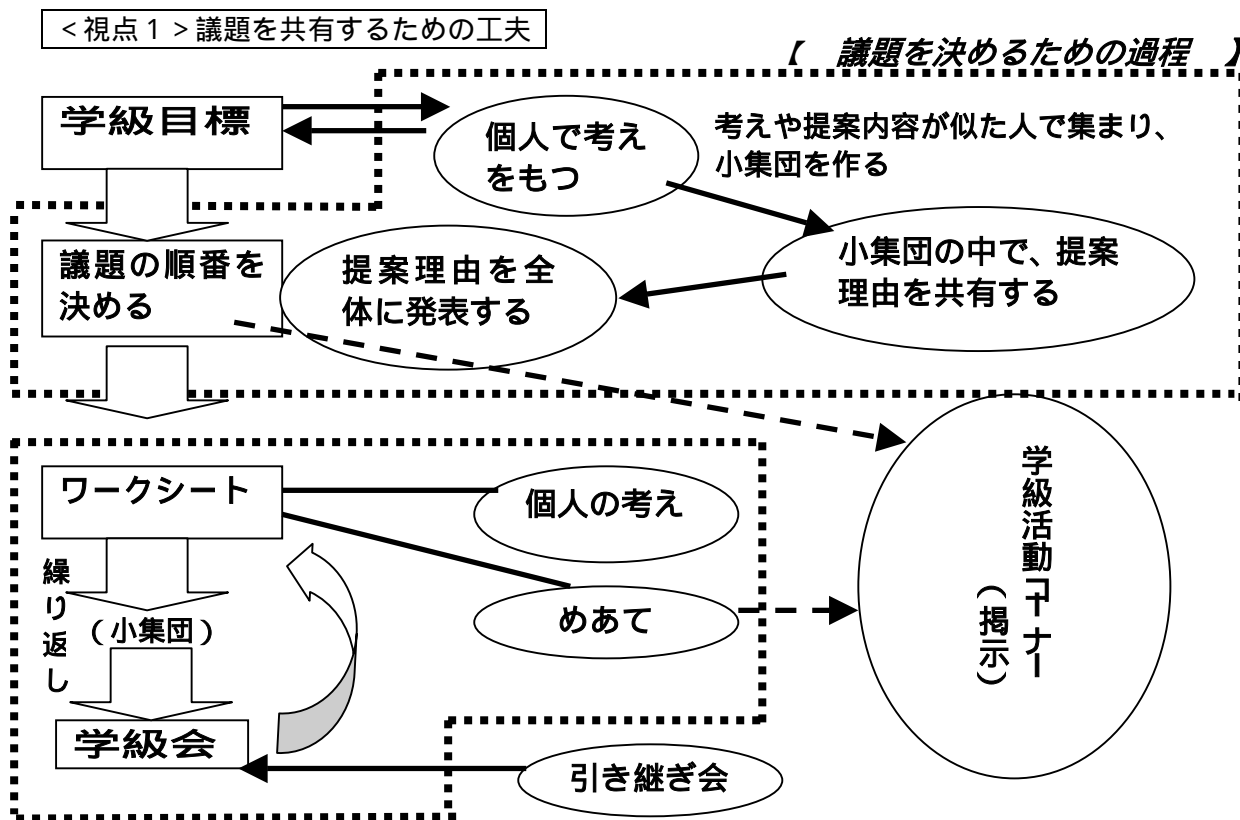


《仮説》
 学級活動において、議題を共有できるようにし、振り返りの場や方法を工夫することによって、児童は互いのもち味を生かし、活動を創り上げていくようになるだろう。



《目指す児童像》
互いのもち味を生かして、ともに願いを実現しようとする児童
 自分の思いや考えを自分なりの方法で表現できる児童（発信）
 友達の思いや考えを分かろうとして、すすんでかかわる児童（受信）

3 研究の内容



【 実践事例 】対象学年 3年生

議題名 「3の2オリンピック運動会の内容を決めよう」

実践内容

学級目標「元気なクラス・やさしいクラス・おもしろいクラス」の見直しをしながら、学級会の意義の確認をした。

「2学期の議題を決めよう」と投げかけ、提案理由も含め個人の考えを出し合った。

- ・お化けやしきをしたい・スポーツ大会をしたい・ミニ劇場がやりたい
- ・学級の歌を作りたい・3の2芸大会がしたい・ミニ運動会がしたい
- ・3の2オリンピックをしよう・学級の旗を作りたい

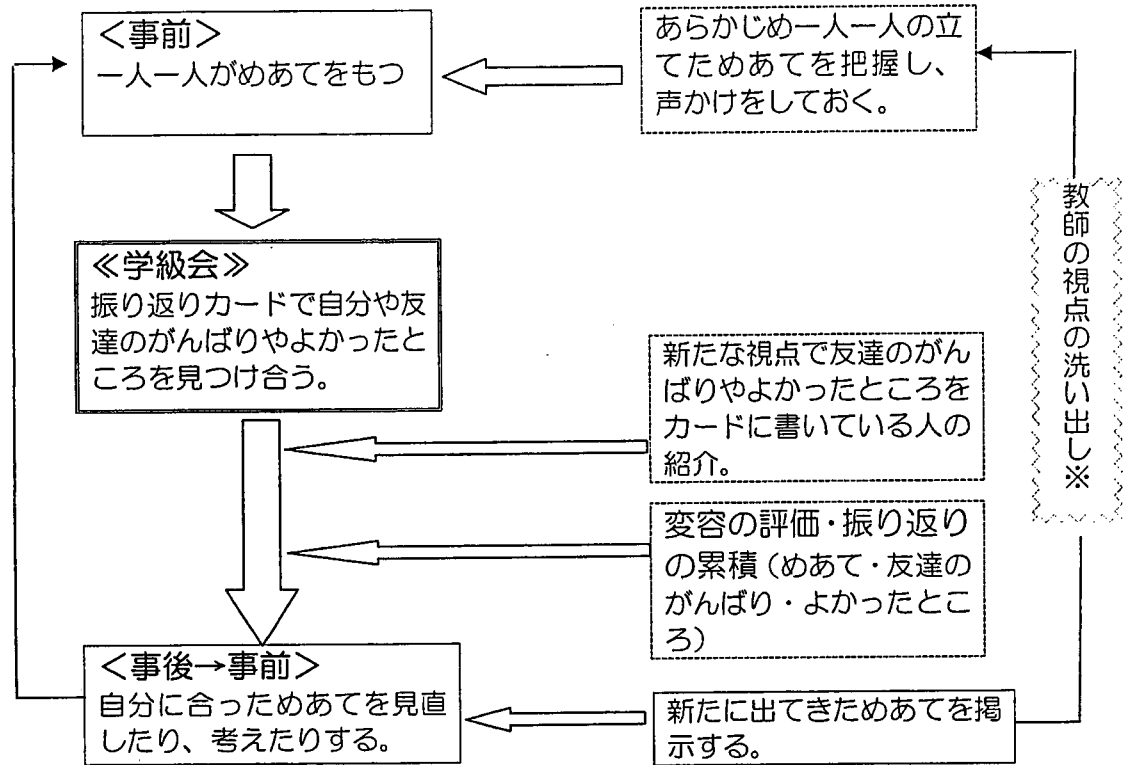
考えや提案内容が似た人で集まり小集団を作り提案理由を共有し、提案理由を全体に発表した。

議題の順番を決めよう」 学級全体で話し合う

- ・どの議題からやったらいいかな。・自分たちで出した議題をいつごろやりたいかな。
- ・他の時間にできるものはあるかな。・くっつけられそうなものはあるかな。

成果 以上のような過程を踏む中で、学級全員で議題を共有し、議題の順番を決めることができた。さらに、話し合いでは議題にこだわりをもつようになり、提案理由をふまえての意見・学級目標を意識した意見が出されるようになった。

<視点2> 振り返りの場や方法の工夫 児童の課題・・・自信がない・出し方がわからない・もち味がわからない・深くかかわらない 教師の支援



- ※教師の視点の洗い出し (例)・・・児童の姿をとらえる時の視点の明確化
 発信・・・学級目標や提案理由を踏まえた意見を言う。
 近くの子に意見を言ったり、相談をしたりする。
 友達のがんばりやよかったことに気づき、書いたり発表したりする。
 受信・・・友達の話を最後まで聞く。
 友達の意見に対して、うなずいたり、拍手をしたりする。
 ともだちのよさやがんばりに気付く。
 受信→発信・・・友達の意見を聞き、自分の考えを見直したり、意見をかえたりする。
 友達が出した異なる意見や似ている意見を合わせてよりよい考えを出す。
 友達の考えを受け、実現に向けて工夫をしたり、助け合ったりする。 など

【 実践事例 】 4年生児童Aの変容

<児童Aの当初の実態>発言したことはなく、自信がもてない。話をよく聞いている。

	児童のめあて	めあての達成と振り返りカードの内容	○ 児童の姿と分析 ☆ 教師の支援
9月第1回	意見を言う。(話したい)	達成できなかった。言いたかったけど、なかなか言えなかった。めあてが達成できなくて残念。	○ 「意見を言う(発信)」というめあてにこだわる傾向にある。そのため、ずっとめあてを達成できていない。友達の話をしっかり聞くことができるが、そのよさに気付いていない。 ☆ 新しい観点の提示・聞くこと(受信)の価値付け 全体に向け、意図的によく話を聞いている児童のことを賞賛し「発言することがなくても、聞くことで大切な協力をしているんだね。」と価値付ける(受信の姿)。

9月 第2回	意見を言う。司会さんの話を聞く。	達成できなかった。話せなかった。	めあてが変化する。前回の助言を生かしたためあてを立てる（聞くことの価値を認識できたため）。
			新しい観点の提示・・・聞くこと（受信）の具体的な姿を例示。 全体に向け、友達のがんばりの見つけ方を例示。 ・ 黒板記録が止まらないで、 <u>がんばって書いていた。</u> ・ <u>おこらないで話合いに参加していた。</u>
9月 第3回	手を挙げて意見を言う。	達成できなかった。意見が出なかった。言えなかった。今回は手を挙げられなくて残念でした。次は絶対に手を挙げたい。	発言したいという強い意志のあらわれ。 受信の姿の認識。発言できないが、 <u>発言しようとかんばっている友達の姿を、がんばっていた人として振り返りカードに書いていた（発信）。</u>
			全体の場での賞賛・・・受信の価値付けと発信の手助け 教師から全体に紹介。
9月 第4回	意見を言えなかったら、友達と言う。	達成できた。意見を言えた。	めあての変化（自分に合った発信の仕方を発見）。 前時の賞賛での自信 手を挙げて発言（発信）。
			全体の場での賞賛・・・たくさんの友達からの賞賛される。自分の思いを言葉で伝えること（発信）ができたことを賞賛する。全体へは、Aさんのがんばりを見つけれられたこと（受信）を賞賛。

<成果> 学級全体へ、よさの見つけ方を示していくことで、めあての立て方が広がり、より自分に合っためあてを立てられるようになった。そして、自分なりのかかわり方（もち味）が分かり、安心して活動することができるようになった。個々の実態を考えながら、全体へのアプローチを意図的にやっていくことで、最終的には個を伸ばすことができた。

4 成果と課題

(1) 成果

ア 議題を共有するための工夫

- ・ 議題を決めるための過程を踏むことによって、一人一人が自分なりの形で話合いに参加できるようになった。
- ・ 自分の思いや願いが議題に生かされたことで、積極的に話合いに臨む姿勢やこだわりをもって発言する姿が見られた。
- ・ 議題が共有できたことで、友達の提案でも活発に話合いに参加できるようになった。

イ 振り返りの場や方法の工夫

- ・ めあてを掲示することで、参加の仕方の視点が広がり、自分に合っためあてをもてるようになった。
- ・ 自分に合っためあてをもつことができるようになったことで、適切な自己評価ができるようになり、次の活動への意欲につながった。
- ・ 友達のがんばりやよさを見付ける振り返りの活動を積み重ねる中で、それぞれにもち味があることに気付くようになった。

以上のように、互いのもち味を認め合うことで、楽しみながらすすんで集団活動に取り組むようになった。

(2) 課題

- ・ 発信・受信の姿を整理したことにより、教師自身も児童を評価する視点が広がり、終末の助言にも生かすことができた。さらに、個々に応じた助言などの具体的な支援策も検討し工夫していきたい。
- ・ 議題を共有する過程において、同じ考えの小集団で話し合って提案する活動は、互いの意見を批判し合うためではなく、互いの意見（議題）を生かし合う方向で行うようにさせたい。

IV 高学年分科会

仲間と共感し協力する児童を育てる指導法の工夫

1 主題設定の理由

児童が意志表示を明確に行う前に大人が児童の意をくみ取り、先に対応してしまうと、児童は意思表示の大切さを学ばないまま成長することとなる。また、幼児期から児童同士で遊ぶのではなく、常に児童の遊びの場に大人が介入し、児童の遊びをコントロールしてしまうと、児童だけでルールを考え遊ぶ体験が少なくなってしまうことがある。このような経験しかもたない児童は、高学年になっても友達とかかわり合いながら、友達もよく、自分もよい行動を選択し、実践する力を十分に身に付けることができない。様々なゲーム機などの普及により、一人で遊ぶ機会が多くなったこともこのような事態をさらに助長させている。このため、現代の児童の実態として、児童が他とかかわる力、コミュニケーション能力の低下が見られるようになったのである。さらに、児童一人一人の家庭環境の違いだけでなく、学校での指導の違い、生活環境の違い、経験の差などにより、話し合い活動の力に大きな差が出てきている。

児童のアンケート調査の結果からも上記を裏づけするような次のような実態が明らかになった。その一つ目は、「話し合った様々な活動をみんなで実践するのは好きだ」と感じている一方、「自分の考えをうまく言えない」「どう友達にかかわればよいか分からない」といったコミュニケーション能力の低い児童が多いこと。二つ目は、「誰かがやってくれる」という思いが強い依存的な児童が多いこと。三つ目は、「一緒につくる喜び」や「本気で自分たちで決めたことを実践し楽しむ」といった経験が少なく、何をしたらいいのかとまどっている児童が多いことである。その反面、話し合い活動が好きで、話し合いが進められ、実行にも移せる力をもった児童もいることも同時に明らかになった。

以上の実態を踏まえ、まず、児童一人一人の他とかかわる力を高めるために、一人一人の内面的な充実を図り、「みんなでやって楽しかった」という満足感や「意見が言えた」「自分の思いをみんなが認めてくれた」という所属感を得ることができれば、自分のよさが分かり、自信に結び付き、行動にもうつせる児童が増えるのではないかと考えた。自信をもたせるための支援をして、相手のよさも認め合う活動へと発展していくことにより、学級全体の共通の目標に向かってともに考え、協力し、解決していこうとする児童が育つと考えた。

そこで、本研究では、目指す児童像を次のようにとらえた。

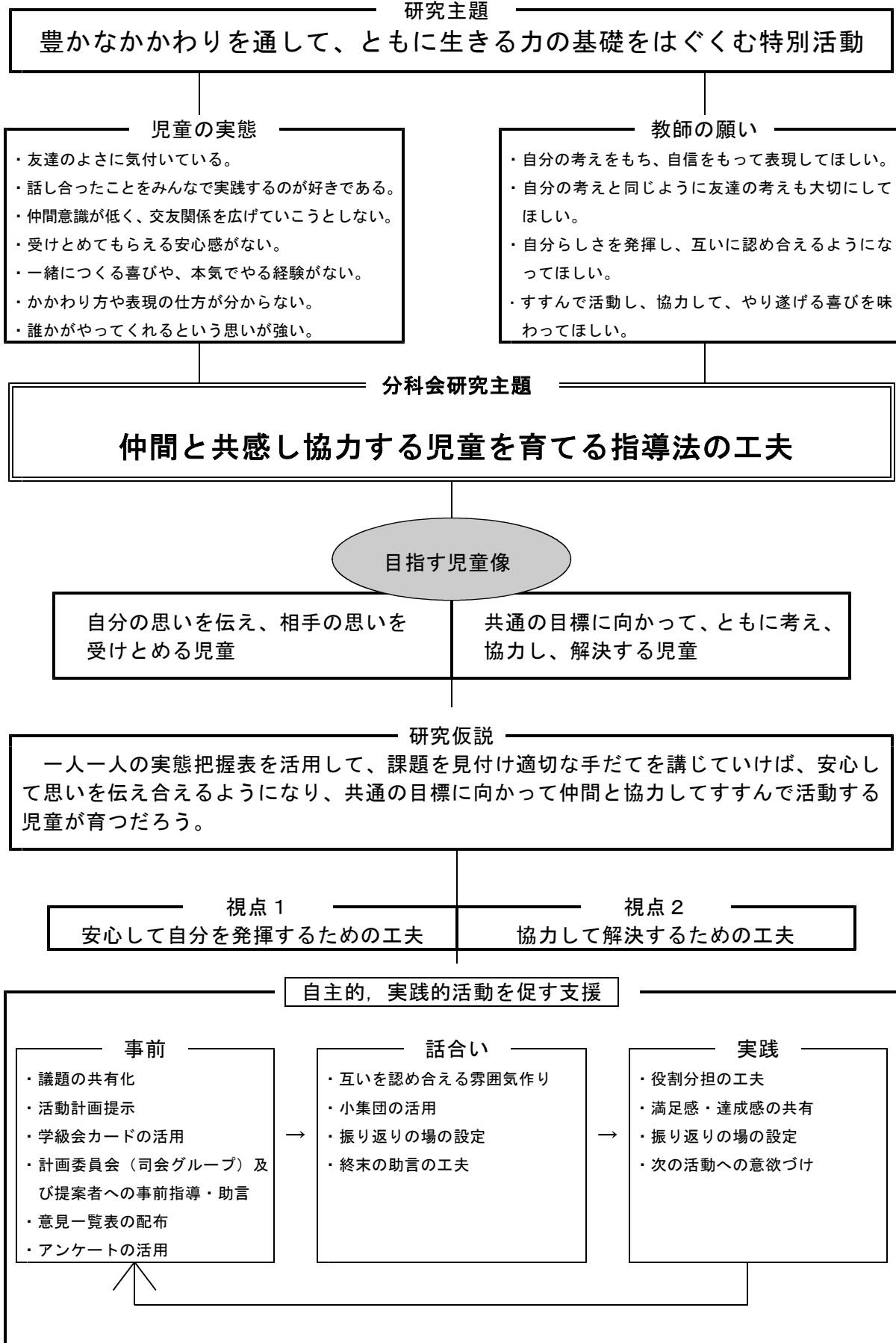
- 目指す児童像**
- ・ 自分の思いを伝え、相手の思いを受け止める児童
 - ・ 共通の目標に向かって、ともに考え、協力し、解決する児童

このような児童像を目指すために、一人一人の実態に合わせた支援をすることにより、学級の一員としての自覚が高まり、一人一人が安心して思いを伝え、共通の目標に向かって、仲間と協力してすすんで活動する児童が育つだろうと考え、本研究主題を設定した。

研究仮説

一人一人の実態に合わせた自主的、実践的な活動を促す支援を心掛ければ、学級の一員としての自覚が高まり、一人一人が安心して思いを伝え、共通の目標に向かって、仲間と協力してすすんで活動する児童が育つだろう。

2 研究構想図



3 研究の内容

(1) 児童一人一人の課題に応じた支援を行うための児童の実態把握

本分科会では、学級集団を構成している児童一人一人の課題に応じた支援を行うために『児童の実態把握表』を活用し、個に焦点をあてた研究を行った。

互いの立場や考えを認めて、思いやり、協力して解決していこうとする態度（ともに生きる力）をはぐくむためには、自分たちの発意・発想を自分たちが考えた計画で協力して実践し、満足感や達成感を味わうことが大切である。この一連の活動過程を通して児童の自主的・実践的態度の実態が把握できるよう、実態は、事前、話し合い、実践の3つの場面に分け、学級の児童の実態に応じた観点で評価した。また、評価した実態や課題に対して教師が適切な支援ができるように教師が児童の活動の流れに沿って具体的な手立てを講じることにした。

教師が児童を評価する際の規準は、「平成15年度東京の教育21 研究開発委員会指導資料」と「平成15年度教育研究員研究報告書 小学校特別活動」を参考にした。

授業実践で使用した『児童の実態把握表』の一例

児童名	議題の 発案	考えを もつ	進んで発 言する	受けと める	実践す る	実態および、自主的、実践的態度を促すための支援 の手立て
A	◎	○	△	◎	◎	話し合いも実践もとても好きで、普段の生活の中では元気な児童だが、みんなの前での発言ができない。事前に考えを聞いて自信をもたせたり、振り返りカードで励ましたりしていく。

期待する児童の行動（○印を付けるときの規準）

評価の観点	具体的な児童の行動
議題の発案	よりよい学級にするために議題を見付け、議題として発案する。
考えをもつ	課題を解決するため、積極的に自分の考えをもって話し合いに参加する。
進んで発言	提案理由を考えながら発言する。
受けとめる	友達の意見を受けとめ、自分の考えと比較する。
実践する	協力して活動したり、責任をもって役割をやり遂げたりする。

実態把握を行うことによって得られた児童の課題から学級の実態に応じた次のような支援を行った。

(2) 活動計画提示及び学級会カードの活用

1学期に実施したアンケートから、学級会での発言が少ない児童は学級会への参加意識が低く、学級会があまり好きではないという傾向があることが分かった。また、発言が少ない理由で一番多かった答えは、「議題に対する自分の考えが思いうかばないから。」であった。

そこで、一人一人の児童がじっくりと考え、自分なりの考えをもった上で学級会に参加するために、議題と何について話し合うのかという柱立てを学級会の前に提示し、自分の意見を事前に学級会カードに記入させるようにした。

このことにより、「自分の考えが思い浮かばないから発言できない。」という児童もゆっくり時間をかけ、教師の助言も得ながら、話し合いの流れに沿って自分なりの考えをもって学級会に参加することができるようになった。

また、自分の考えをもっていることで友達への考えにも強い関心を持ち、自分の考えとの共通点や相違点を見出しながら考えを深めることができるようになった。さらに、話し合いの柱立てを全員が事前に把握しておくことで、話し合いの焦点化を図ることができ、学級会を円滑に運営することができるようになった。

学級会カード→

(3) 小集団での話し合いの活用

学級全員の前で発言したり、自分の思いを伝えたりすることが苦手な児童が多いという実態から小集団での話し合い活動を実施した。小集団で話し合った考えを学級全体へ提案するという活動形式をとった。

小集団の場面では、話しやすい雰囲気生まれ、活発に話し合い活動が行われた。自分の考えをもっているにもかかわらず、全体では、なかなか発表できなかった児童も自分の意見を積極的に発言し、自分の思いや願いを伝える姿が見られた。

学級共通の課題に対して、意欲的な話し合い活動が行われ、協力して解決する意識が高まった。

また、小集団の中で役割(司会・記録係など)をもたせた。それにより、小集団内での司会が順番に発言を促す、記録係がホワイトボードに書くなどして、話し合いを円滑に進めることができた。小集団内で役割があることで、一人一人の発言を大切にしながら決められた時間で意見をまとめることができた。



(4) アンケートの活用

↑ 小集団での話し合い

提案者の提案理由を基に、学級全員が議題に対する思いや願いを共有化するために、司会グループがアンケートを作成し、実施した。アンケートは司会グループが提案者の「どんな会にしたいか」など議題に対する思いを聞き取り作成した。話し合いの前にアンケートを実施し、その結果を基に議題名や話し合いの柱立てなどをつくっていくことで学級全員が議題に対する思いや願いを共有することができた。全員で決定することにより話し合いへの参加意欲が高まるだけでなく、解決に向けての見通しがもてるようになった。

また、司会グループが柱立てに対する学級一人一人の考えを一覧表にまとめ、学級全員に配布した。そのことによって、友達の考えと自分の考えとを比較し、共通点や相違点をつかむことで、多様な考え方を生むことができた。少数意見にも注意し、互いの意見を生かし合おうと協力して解決する姿も見られた。

4 成果と課題

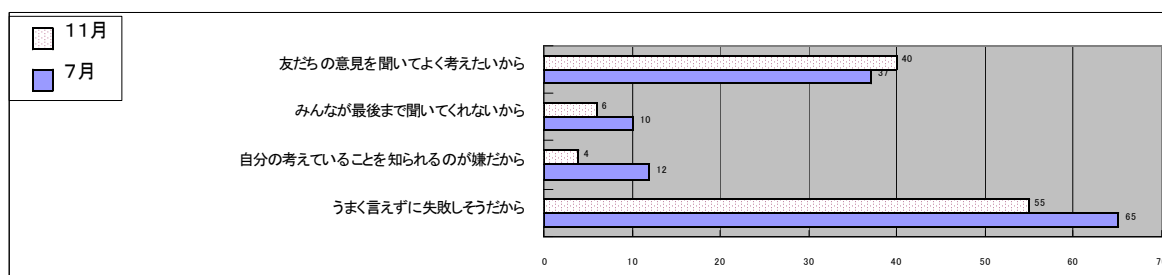
(1) アンケート結果

本分科会では、児童の実態及びその変容をつかむため、アンケート調査を実施した。

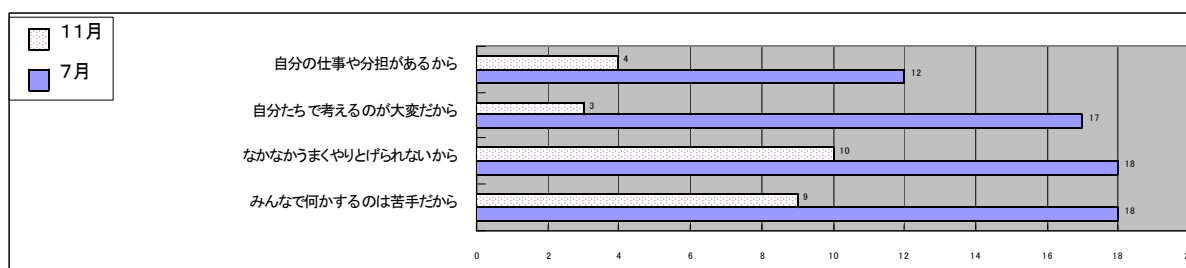
※ 調査時期・人数 平成16年7月・236人 11月・233人

解答方式 選択式 複数回答

A 話し合いですすんで意見を【あまり言えない・言えない】理由



B 話し合いで決めたことを実際にやるのが【あまり好きではない・嫌い】な理由



Aのグラフから、自分の考えをみんなに知られたり、みんなの前で失敗するのを恐がったりして、発表することを嫌がる児童が減ったということが分かる。

Bのグラフから、みんなで何かすることへの苦手意識が減り、自分たちで考えたり役割を担うことを負担に思う児童が減ったことがわかる。

(2) 成果

ア 視点1 安心して自分を発揮するための工夫

- ・ 小集団の活用により、友達と意見交換をしながら生き生きと活動する姿や失敗を恐れずに積極的に発言する姿が見られるようになった。
- ・ 友達の意見を受けとめて、自分の考えを深めたり修正したりできるようになった。
- ・ 振り返りの場を設定し、お互いの良さや努力を伝え合うことによって、安心して思いを表現できる雰囲気づくりができた。

イ 視点2 協力して解決するための工夫

- ・ 発案から実践までの過程で、一人一人が役割をもち、自分達で計画し、やり遂げる経験の中で、みんなで協力することの楽しさや大切さを実感し、次の活動への意欲につながることができた。
- ・ 児童の実態把握表を作成し、一人一人の児童の実態を把握することで、児童の抱える課題とその原因に気付き、個に応じた支援や手だてを講じることができた。
- ・ アンケートを活用したり、事前に議題の共有化の場を設けたりすることで、提案理由に沿った考えをもって学級会に臨み、協力して解決できるようになった。

(3) 課題

- ・ 小集団での話し合いは活発に行われ、有効な手だてとなったが、それぞれの小集団内の指導者の評価、記録の方法を工夫し、それを終末の助言に生かしていく必要がある。
- ・ 仲間との共感を深めるために、学級活動以外でも意見を交流したり、アドバイスを交換し合ったりする場を多くつくる。

V 児童会部会

代表委員会活性化のための指導法の工夫

1 主題設定の理由

本来児童一人一人は学校生活をより楽しいもの、よりよいものにしたいという願いをもって生活している。代表委員会活動においても、本分科会が実施した代表委員会経験者へのアンケートで「話合いに基づき活動した」ときに代表委員会が楽しく感じられたという声が多く上がっている。頑張ることができたという充実感を味わうことが楽しさにつながっていることが分かった。

一方「よかったことや楽しかったことはない」と答える児童や、代表委員会は帰る時間が遅くなるので加わりたくないと思える児童もおり、一人一人の児童に充実感を味あわせる活動になっていないことも事実である。

現代の日本社会は、多くの物質的豊かさを得られるようになったが、人としての人間性・社会性が比例して成長しているとは言えない。このような現状に対して、児童の社会性の育成を目標とする特別活動の役割は大きい。特に児童会活動は学校全体を豊かにし、全校児童に大きな影響を与えることができる活動である。よって、児童会活動は児童の社会性の育成に、重要な機会となりえる。しかしながら、教師のお手伝いや下請けの仕事ではその役割を十分に果たすことはできない。

本分科会では豊かな児童の人間性・社会性をはぐくむ手だてとして児童会活動、特に学校のリーダーシップを任されるべき児童の集まった代表委員会活動に焦点をあて、その活動の充実を図っていきたいと考えた。

全体研究主題「豊かなかかわりを通して、ともに生きる力の基礎をはぐくむ特別活動」を、本分科会では、「自分も楽しく、みんなも楽しくなること」ととらえ、活動が停滞しがちな代表委員会において、どうしたら活動に活気を与えられ、その活動から児童がやって良かったという満足感を得られるのかを考えた。

全校を見据えた活動に活気をもって取り組むことができれば、必ずや児童の心の中に自分だけではなく、学校全体のために頑張れたという満足感や友達とやり遂げた連帯感をはぐくまれ、時間的不満も緩和、解消されるであろうと考えた。

教師へのアンケートにも、代表委員会に期待する多くの要望が出された。自発的・自治的な活動を行う機会を保障することで、その期待に応えられるのではないかと考え、さらに、授業数の確保の面から時間的制約が多く、児童の側においても時間への抵抗感が強い代表委員会活動ということもふまえて、どこの学校でも行うことのできる実践的な活動を追究した。

以上のことから、本分科会では、活動の充実を図ることで、児童の思いをより満足感に近いものへと変容させることができ、ともに生きる力の基礎をはぐくめるのではないかと考え、本分科会主題を「代表委員会活性化のための指導法の工夫」とした。

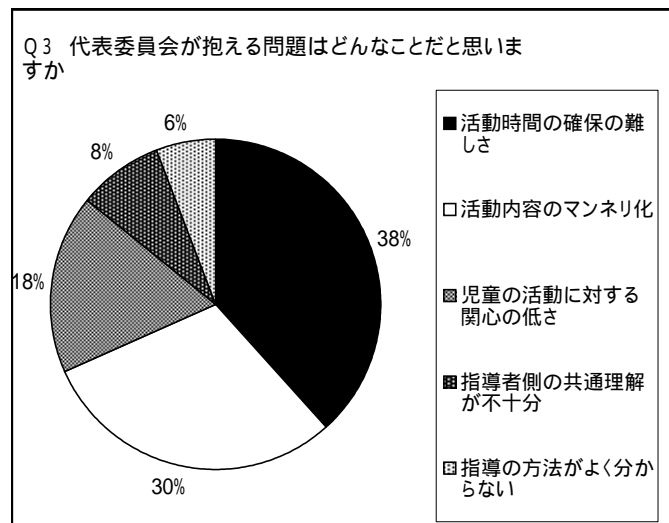
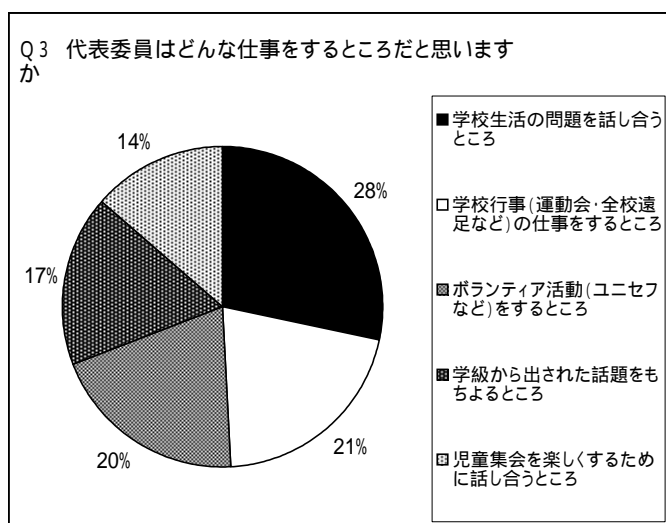
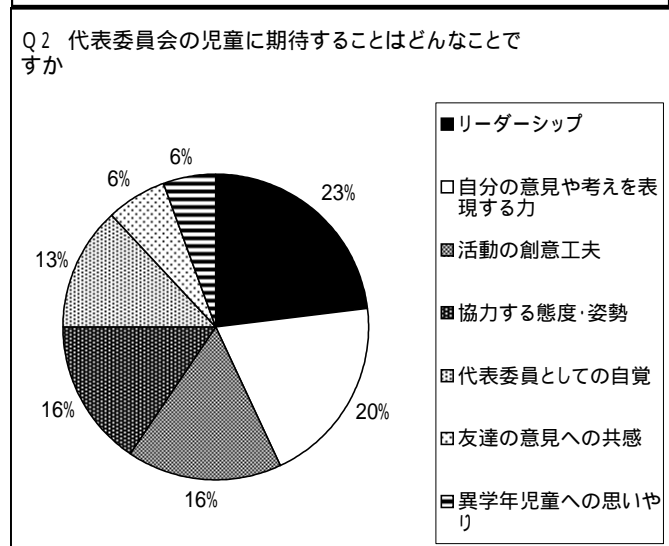
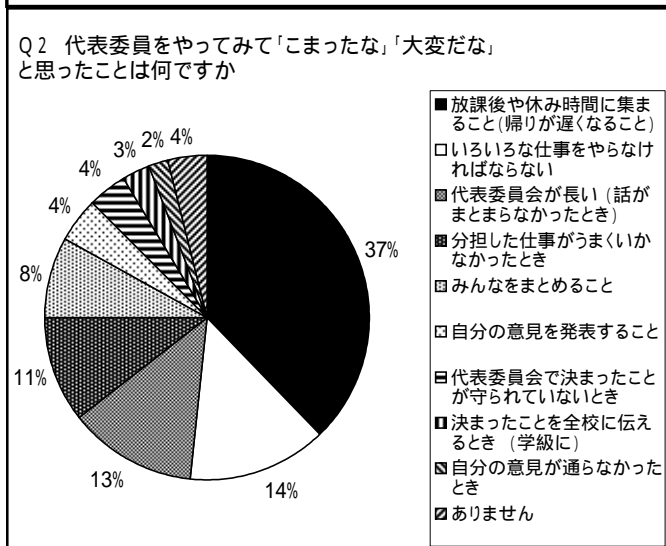
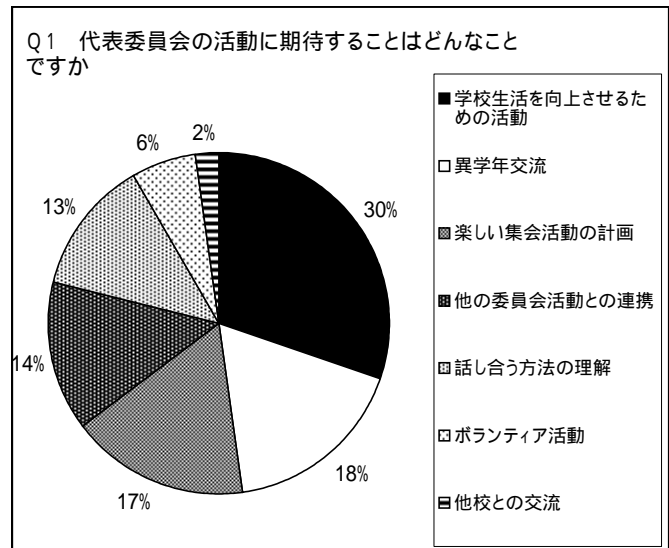
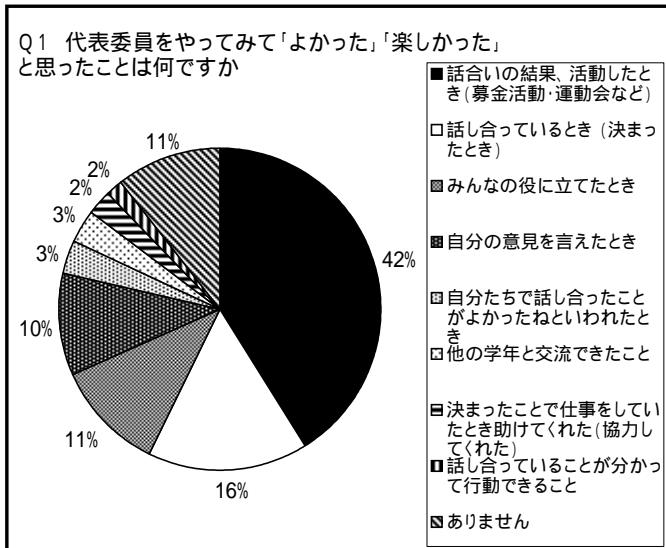
2 アンケート結果

代表委員会経験児童

3年生 9名 4年生 79名
5年生 81名 6年生 126名 (都内複数校)

代表委員会に対する教師の考え

59名回答 (都内複数校)



3 研究構想図

【研究主題】

豊かなかかわりを通して、ともに生きる力の基礎をはぐくむ特別活動

代表委員会における児童の実態

- ・活動に対しての満足感は得られていないが、与えられた活動にはまじめに取り組む。
- ・児童会活動の意義や必要性は感じているが、活動時間への不満が多い。
- ・自発的・自治的な活動はあまり見られない。(活動が形式化している)

教師の願い

- ・一人一人の願いや思いが反映される活動をさせたい。
- ・学級の代表、学校のリーダーとしての代表委員を意識しながら活動させたい。
- ・限られた時間の中で、全校児童も自分たちも楽しめるような活動をさせたい。
- ・学校生活をよりよくする自発的・自治的な活動をさせたい。

分科会研究主題

代表委員会活性化のための指導法の工夫

目指す児童像

- ・自分たちの願いや思いを表現し、友達の考えを共有できる児童
- ・自分たちの発想を生かしてやり遂げられる児童
- ・自分たちの活動に達成感を味わい、次の活動に生かそうとする児童

仮説

代表委員会活動において、願いや目的を共有し児童の発想を生かした活動をすることによって、一人一人が達成感を味わい、代表委員会が活性化するであろう。

視点1

かかわりを深める場の工夫

- (手だて)
- ・レクリエーション遊び
 - ・全校へ代表委員の紹介
 - ・名札
 - ・座席配置
 - ・異学年小集団での話し合い

視点2

目的を共有させ、発想を生かす支援の工夫

- (手だて)
- ・代表委員会のめあて作り
 - ・議題作りの基となる活動や情報の収集
 - ・児童の考えを取り入れた年間計画
 - ・議題と決定したことの、全校への周知
 - ・代表委員会ファイルの作成
 - ・環境整備

視点3

達成感を味わわせる支援の工夫

- (手だて)
- ・振り返りカードの活用による話し合いでよかったところの発表
 - ・教師からのアドバイス
 - ・活動の紹介(代表委員会だより、学校だより、ホームページ等)

4 研究内容と実践事例

視点1 かかわりを深める場の工夫

- (1) レクリエーション遊び

初めて顔を合わせる異年齢集団を、温かく楽しい雰囲気にするために、話し合いを始める前にレクリエーション遊びを取り入れる。
- (2) 全校への計画委員・代表委員の紹介

全校集会での自己紹介、一人一人の抱負を載せた児童会だよりの作成、児童会用の掲示板でのメンバー紹介を行う。
- (3) 名札

所属、個人名を記入した名札を用意する。
- (4) 座席配置 異学年小集団での話し合い

上学年と下学年がペアになれるように座席を配置し、小集団での話し合いに生かす。

視点2 目的を共有させ、発想を生かす支援の工夫

- (1) 代表委員会のめあて作り

学校生活が楽しく豊かなものになるような活動をする、代表委員会の目的をとらえさせるために、自分たちでめあてを立て、活動の振り返りのよりどころとする。

(2) 議題づくりの基となる活動や情報の収集

- 他校の活動例（ユニセフ集会、6年生を送る会等）を紹介する。
- 各学級から提案された学校生活での問題点や代表委員会で取り上げてもらいたいこと、全校児童の願いや目的が共有され、学校生活がよくなるものに焦点をあて、計画委員会が議題として決定する。

議題を考えたよ

代表委員会は、学校生活が楽しく豊かなものになるよう、他学年の人と協力して話し合う場です。
代表委員会で話し合ったほしい議題を案め、記録しましょう。

案出した議題	選ぶためのめやす(◎ ○ △を付けてみましょう。)				○の数	いつ、どこで解決するか。(ここは児童会本部委員で考えよう。)
	全員が必要と感しているのか。	全員に関係があるものか。	学校がよくなるものか。	自分たちで実行できるものか。		
ちゅうぶをまてるかあ。	◎	◎	◎	△	6	11/4(水)代表委員会

【 実践事例 】

↑ 議題づくりのためのカード

ユニセフ集会前に教師と代表児童がユニセフ協会に出向き情報収集を行った。そこで得た情報やポスターなどを集会活動・宣伝活動に使い、代表委員の意識を高めた。活動に対する目的意識や意欲が高まると、自分たちから集会の内容やキャラクターづくりの案などで今までにない企画が多く出され、その後の自発的・自治的な活動につながった。

(3) 児童の考えを取り入れた年間計画

決められた活動と代表委員が考えた自発的・自治的な活動を合わせて、代表委員会の年間計画を示す。視点2の(2)で取り上げた議題を話し合う時間を設定して、形骸化した代表委員会活動からの脱却を図る。

【 実践事例 】

1 単位時間のロング集会では、例年、各学級がお店を出すフェスティバルを行っていた。話し合いを含め代表委員の活躍の場が限られていたので、今年度は全校で楽しめる集会を企画しようと提案したところ、学級対抗の大会を行うことになった。集会の企画から運営まで年間計画に組み込み、実践した。

種目は、各学級で話し合ったことを基に、「クラス対抗のドッジボール大会」に決定した。その後、ルールや賞を含め役割分担を話し合った。

当日は開会式から閉会式まで代表委員が運営した。決勝戦は6年生と3年生になった。3年生に配慮しながらも真剣に戦っている6年生の姿があり、他学年にとっては、間近に6年生の力を感じられる試合となった。

代表委員の一人一人が話し合いを重ね、3ヶ月間、準備をしてきたが、達成感を味わうことのできる取り組みであった。

(4) 全校への議題と決定したことの周知

全校児童が親しみやすい議題名を考え、代表委員会の学級への報告活動を徹底する。

児童会便りの作成はもとより、横断幕やポスター製作、校内放送など、行事に応じた広報活動を取り入れる。

【 実践事例 】 議題名 「スーパー歩こう運動」

学校生活での全校児童共通の課題「廊下を走らない」ことを話合うために、全校児童がやる気になる議題名を計画委員に考えさせた。児童の発想から考えられた議題名「スーパー歩こう運動」は、全校児童に親しまれ、各学級での取り組みを活性化させることができた。また、代表委員自身が、学級の中で主体的に報告・実行を行うことができた。

(5) 計画委員・代表委員ファイルの作成

メンバー表、活動予定表、議題集め用紙、昨年度の児童会だよりを配布し、随時、委員会記録、児童会だよりをファイリングできるようにする。個人のファイルをもつことにより、計画的な活動を促すことができる。

(6) 環境整備

児童会室内に、代表委員会のめあて、活動内容、活動計画が分かるような掲示をする。また、今までの活動資料などをいつでも見られるように整理しておく。

視点3 達成感を味わわせる支援の工夫

(1) 振り返りカードの作成（右ページ上写真参考）

代表委員会のめあてにそった項目について、自己評価を行う。

(2) 話し合いでよかったことの発表

児童同士が認め合う・励まし合う活動を通して達成感をもち、以後の活動への意欲へと結び付けていく。

(3) 教師からのアドバイス

教師は児童の自己評価欄にコメントを書き、一人一人のがんばりを認める。また、自己評価の低かった項目については、一人一人の実態に応じたアドバイスを書き入れる。

(4) 児童会活動の紹介

活動の成果を、児童会だより、学校だより、ホームページ、児童会用の掲示板などに載せ、全校に紹介する。

振り返りカード→

5 成果と課題

(1) 成果

教師の意識の高さが、そのまま児童の意識を高めることにつながった。教師側が、目的意識やねらいをしっかりとち、児童に議題や活動内容を共有させながら手だてや実践を重ねていくことで、初めて個々に達成感をもたせていくことができた。

次に代表委員会の活動の中に「自分たちが考えた内容」や「自分たちで創り上げた成果」が生かされれば、おのずと自発的・自治的な活動につながるということが分かった。

また、指導者である教師が児童の自発的・自治的な活動により思わず感動する、という場面があったり、後期の委員会を決めるときに、また代表委員をやりたいという児童が多かったりしたという報告が各学校からされた。

このような実践の輪を大きく広げていきたい。

(2) 課題

本研究が「代表委員の活性化」ということで、代表委員会の意識改革、代表委員の担当者の意識改革を中心に研究、実践を重ねてきた。しかし、代表委員会を中心とした児童会活動というのは本来全校児童がかかわるべきで、代表委員が達成感を感じるだけでは全校の活性化にはつながらない。すなわち、全校児童が、児童会の一員であるという風土づくりが重要になってくる。

そのための代表委員会の活動の在り方、指導の方法がこれからの課題と言える。全校児童が主体的にかかわる活動、議題の設定、意見をまとめる手だてなどを考えていかななくてはならないだろう。学校全体に支えられ、学校全体が盛り上がる児童会づくりができれば、さらに自発的・自治的な活動が期待できる。

第1回 代表委員会 10月22日 2:45~3:30 場所5の3となり	
役割分担	司会 () 議題提案 () 黒板書記 () ナンバー () 児童会便り ()
議題	学習発表会スローガン・約束 全校満足反省 その他
話合いの内容と順序	メモ
先生より お楽しみゲーム 代表委員会手帳の使い方	
1 始めの言葉	
2 司会グループの紹介	
3 議題のたしかめ	
4 提案理由の発表	
5 話合い	
①学習発表会のスローガン	決まったこと・学校に伝えること
②学習発表会の約束	①は原案のまま
③全校満足の反省	②原案・えんきん・かわかいいい まじやわい
④その他困っていること	③は原案のまま ④は原案のまま ⑤は原案のまま
6 決まったことの発表	
7 今日よかったことの発表	
8 先生の話	
9 終わりの言葉	④は原案のまま
今日の話し合いをふりかえりましょう。	
1 進んで話し合いに参加しましたか。	はい ぶつ いいえ
2 友だちの意見をしっかり聞くことができましたか。	はい ぶつ いいえ
3 他の学年の人と協力して話し合いに参加しましたか。	はい ぶつ いいえ
4 決定したことに満足していますか。	はい ぶつ いいえ
感想 (自分ががんばったことや思ったこと、がんばっている人など書きましょう。)	はい ぶつ いいえ
は(い)あ? な(い)に(い)ん(い)けん(い)を(い)え(て)ま(し)た(ら)か?	
描かして話し合いがまだ終わってない	
後期児童会スローガン みんなで協力して、楽しく仕事をしよう。	

VI 成果と課題

本部会では「豊かなかかわりを通して、ともに生きる力の基礎をはぐくむ特別活動」を研究主題とし、低学年、中学年、高学年、児童会の4分科会に分かれて研究を進めてきた。各分科会の報告をもとに、本研究の成果と課題をまとめた。

1 研究の成果

- ・ 児童の「かかわり」についての実態を把握することにより、児童に必要な手だてを絞り込むことができた。1対1から小集団、小集団から学級集団へとかかわりを広げる意図的・計画的な場を設定することにより、「自分の考えを伝えよう」「相手を理解しよう」とする意欲の高まりが見られた。
- ・ 「みんなでやると楽しい」「人とかかわり合うと楽しい」と感じられる体験を積み重ね、自分の「もち味」をさぐりながら、みんなで協力することの楽しさや大切さを実感できるようにしたことで、意欲をもって活動に取り組めるようになった。また、集団活動を振り返る場を意図的に設定し、方法を工夫したことで、自分のよさや友達のよさを発見し互いに認め合えるようになるとともに、自分の気持ちをつかみ、相手のことを理解するようになった。
- ・ 児童の発達段階や集団の特性に応じて、自分の思いや願いが表現できるように手だてを工夫したことで、活発に話合いに参加したり、生き生きと活動したりする姿が見られるようになった。
- ・ 教師側が目的意識をはっきりともち、児童に議題や活動内容を共有させながら実践を積み上げていくことによって、児童一人一人に達成感をもたせることができるようになった。

以上のような成果により、本研究の主題である「豊かなかかわりを通して、ともに生きる力の基礎をはぐくむ特別活動」に迫ることができた。

2 今後の課題

児童の実態把握に努め、それによって発達段階や集団の特性に応じた児童の課題も見えてきた。今後、課題に応じたさらに具体的な指導法の研究を深めていく必要がある。

低学年・・・幼児教育や遊びの機能を生かした指導

中・高学年・・・個に応じた具体的な支援の方法

児童会活動・・・全校児童が、児童会の一員である学校風土作り

小集団や学級集団では、お互いを理解し協力することができるようになってきたが、今後さらに日常の様々な場面で「ともに生きる力」を生かし、気持ちよく人とかかわり合うことにより、豊かな人間関係を築く児童を育成するための、研究を継続したい。

平成16年度 教育研究員名簿（ 特別活動 ）

	区市町村名	学 校 名	氏 名
低 学 年 分 科 会	千代田区 中野区 板橋区 小金井市	和泉小学校 仲町小学校 下赤塚小学校 南小学校	前川 靖子 ○ 田所貴美子 子安 久子 林 那々子
中 学 年 分 科 会	中央区 中野区 荒川区 練馬区 江戸川区 町田市 小金井市 東久留米市	泰明小学校 江原小学校 峡田小学校 谷原小学校 清新第三小学校 小山田南小学校 小金井第一小学校 第一小学校	森 ゆり香 本多 美和 原田 恵子 鈴得 貴子 濱内 朋子 山中 慈子 吉田 由美 ○ 吉田 有子
高 学 年 分 科 会	杉並区 北区 板橋区 練馬区 葛飾区 八王子市 武蔵野市 武蔵村山市	松ノ木小学校 西浮間小学校 高島第一小学校 大泉第六小学校 二上小学校 第三小学校 関前南小学校 第八小学校	稲田 祥子 矢澤 恵美 勝田 光徳 吉田 和子 谷岡 省三 ◎ 久保 明彦 木下 史子 ○ 下田 美和
児 童 分 科 会	大田区 足立区 武蔵野市 小平市	矢口東小学校 中島根小学校 井之頭小学校 小平第十小学校	古谷 岳史 奥井 秀美 ○ 緒方 康裕 諏訪伊都子

◎世話人 ○副世話人

担当 東京都教職員研修センター統括指導主事 大熊 雅士
指導主事 加納 一好

平成16年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成16年度 第21号
(東京都教育委員会主要刊行物)

平成17年1月24日

編集・発行 東京都教職員研修センター
所在地 東京都目黒区目黒1-1-14
電話番号 03-5434-1974

印刷会社名 鮮明堂印刷株式会社